

## 「浅草紅団」の世界

湯川 説子\*

### 目次

はじめに

1 川端康成「浅草紅団」の執筆まで

(1) 明治期から大正期の浅草

(2) 川端康成と浅草

2 「浅草紅団」について

3 浅草の記憶

(1) 不良少女・弓子の両義性

(2) 姥が池の伝説

4 描かれた浅草名所

(1) 水族館とカジノ・フォーリー

(2) 隅田公園

(3) 地下鉄食堂のビル

おわりに

キーワード 浅草紅団 川端康成 姥が池 水族館 関東大震災 カジノ・フォーリー  
隅田公園 地下鉄食堂のビル

### はじめに

川端康成の「浅草紅団」は、浅草の不良少年少女を中心に、関東大震災後の浅草の風俗を描いた作品だ。物語には、復興大公園のひとつである隅田公園、鉄橋工事の進む東武鉄道、コンクリートの尖塔を戴く地下鉄食堂のビル、そして日本初のレビュー劇場・カジノフォーリーといった、新時代を象徴する場所や建造物が、恰好の舞台として登場する。その一方で、浅草寺の境内や、隅田川べりの風景、震災によって倒壊した凌雲閣の回想など、古い浅草に目を向けたシーンも少なくない。

浅草は、明治中頃には、見世物小屋から転身した活動写真館、花屋敷の娯楽施設、巧みな演出で人気を呼んだ日本パノラマ館、日本一の高塔・凌雲閣などによって、日本を代表する盛り場として多くの人で賑わった。大正12年の関東大震災で、一帯は壊滅的な被害を受けたが、浅草寺本堂の焼失は免れ、

\*東京都江戸東京博物館学芸員

浅草六区では日本館が12月に開館したのを皮切りに、年内に電気館、三友館、オペラ館などのバラックが立ち並び、活動写真街の復興は著しかったという。浅草区における家屋建物の倒壊焼失は九割五分とされ、国による復興計画の実施は急務であった。この震災復興都市計画事業は、大正13年から昭和5年にかけて行われ、区画整理や道路幅員の拡張、河川運河の整備、大小公園の設置、小学校の大火耐震化などに重点が置かれた。昭和4年に東京朝日新聞で連載の始まった「浅草紅団」は、まさにその生まれ変わる浅草を、リアルタイムで活写した作品でもある。

本稿は、作品に描かれた浅草の姿を分析し、その様相を明らかにするものである。まずは、物語を理解する上で必要と思われるその前史——明治期以降の浅草の移り変わりを概観したい。

## 1 川端康成「浅草紅団」の執筆まで

### (1) 明治期から大正期の浅草

江戸時代には両国と並ぶ盛り場として栄えた浅草は、明治初年にも奥山を中心に見世物小屋や大道芸で賑わいをみせていた。明治17年、公園整備計画によって新たに区画された第六区に奥山の見世物小屋は移転し、隣接する花屋敷では山雀曲芸、骸骨踊りなどの興行が盛んに行われ、このほかにも江川一座らによる玉乗り興行や、常盤座や観音劇場での芝居小屋も人気を集めていた。

明治20年開業の富士山縦覧場では、高所からの遊覧を楽しませ、その跡地に明治23年にオープンした日本パノラマ館は、建物内部に描かれた風景と人形、音や光を使用した演出で評判を呼んだ。登高遊覧施設としてエレベーターを備えた凌雲閣もまた明治23年の開業で、高さ約67メートル、10階までは八角形の煉瓦造りで、11、12階は木造であった。新聞縦覧場や土産品の販売所、望遠鏡を備えた展望施設もあり、大正12年の関東大震災によって倒壊するまで、長く浅草のランドマークとして親しまれた。

浅草は日本における活動写真のメッカとしても知られ、六区には、国内初の活動写真の常設館である電気館に続き、三友館、大勝館、パテー館などが次々と軒を連らねた。活動写真館の多くが見世物小屋からの転身をはかったもので、明治期の終わりには寄席や劇場の入場者数を凌ぐほどの人気を見せた。

大正中期の六区では活動写真に加えて、安来節や浅草オペラが話題を集めた。なかでも浅草オペラは、ペラゴロと呼ばれる熱狂的なファンを生み出している。

こうした時代に起こった関東大震災は、大正12年9月1日午前11時58分、マグニチュード7・9の大地震を発端とし、東京の市街地では直後に発生した火災によって未曾有の被害を受けた。東京市における死者・行方不明者は約6万人とされ、電気・ガス・水道などのライフラインが切断、建物は倒壊あるいは焼失し、逃げ惑う人々で市内は混乱を極めたという。

浅草地域では、浅草寺本堂の火災は免れたものの、火災とそれによる烈風が発生し、仲見世や六区の活動写真館をはじめ、花屋敷も甚大な被害を受けた。中でも凌雲閣は、地震によって8階付近から上<sup>4)</sup>が折れ炎上、崩落した瓦礫は周囲を押し潰し、観覧者は振り落とされて死亡したことが伝えられている。

「浅草紅団」には、この凌雲閣の残骸が、赤羽工兵隊によって爆破、解体される際の様子が、震災時のエピソードとして挿入されているほか、地震は新しい東京の「振り出し」であったとし、震災を契機に変化を遂げていく浅草の様相を、登場人物の心情と重ね合わせ、伝えている。

次に、作品に描かれた浅草の姿を捉えるにあたって、作者・川端康成と浅草との関わりについて確認をしておきたい。

## （2）川端康成と浅草

川端は、予備校時代は浅草にほど近い蔵前に、大学時代は浅草鳥越に、そして「浅草紅団」を執筆した昭和4年からは上野桜木町に住んで、公園には毎日通ったほどの、大の浅草好きであった。

明治32年、大阪市北区に父・栄吉、母・ゲンの長男として生まれた川端は、幼少時に相次いで父母を亡くし、祖父母の許で養育されるも、祖母、姉を続けて失う。14歳の時、祖父の死去によって天涯孤独の身となった。幼いころから作文の才を見せ、中学時代は詩作や俳句、短歌なども試みていたという。親戚にひきとられたのち、寄宿舎生活を経て中学を卒業し、第一高等学校を志望して上京、従兄の住む蔵前に移り住んだのが、浅草との縁の始まりである。川端自身、次のように記している<sup>5)</sup>。

私は十八歳の春、東京へ受験勉強に出て、浅草蔵前の従兄の家に居候した。神田の予備校に通ふかたはら、浅草公園へ通つた。田舎者の私には浅草が異常な魅力であつた。

川端の浅草への大きな憧れは、年若くして親族を続けて失ったことによる孤独が、盛り場特有の華やかさに惹きつけられたとも言えるが、当時の浅草で多く見られた、芸人や浮浪者が醸し出す独特の寂寥感に、自らとの共通点を見い出したからではないかと考えられる<sup>6)</sup>。

第一高等学校在学中の大正7年秋には、初めて訪れた伊豆で旅芸人の一行と道連れになったが、この経験が、のちの作品「伊豆の踊子」（大正15年）を生み出すきっかけとなっている。

大正9年、第一高等学校を卒業した川端は、東京帝国大学文学部に入学、友人らと同人雑誌・第六次「新思潮」の発行を計画し、菊池寛を訪ねて了承を得た。菊池からは翌年、芥川龍之介、横光利一らを紹介されている。

なお、浅草への馴染みを重ねていく様子は、次のように記されている<sup>7)</sup>。

高等学校、大学のころも本郷にゐて、浅草は近かつたから、石浜金作氏らの友人と行つた。大学の前半は浅草の鳥越に下宿してゐた

大正12年2月、川端は、菊池主宰の「文藝春秋」編集同人に加えられている。「浅草紅団」には関東大震災の際、浅草の様子を友人と見て回る、作者自身と思われる人物の姿が描かれている。実際の震災発生時には、石浜金作と町の様子をうかがい、今東光とともに芥川龍之介を見舞い、三人で災害の跡を見て歩いた。

大学卒業後は、同人雑誌「文藝時代」を創刊、また例年訪れていた伊豆湯ヶ島に長く逗留したのち「伊豆の踊子」を發表、青春の抒情を歌いあげた作風により高い評価を受けた。その後、府下の杉並町馬橋、熱海、大森馬込などへの転居を経て、昭和4年9月より移り住んだのが上野桜木町で、ここを拠点に足繁く浅草へ通った。この年、川端はちょうど30歳となっていた。

川端は「浅草紅団」のほかにも、昭和5年から9年にかけて「水族館の踊子」「鬼熊」の死と踊子」「浅草日記」「浅草の姉妹」「浅草の九官鳥」そして「浅草紅団」の続編である「浅草祭」など、一連の〈浅草もの〉を發表している。

これに加え、特に昭和5年から6年にかけては、浅草にまつわるルポルタージュ風の読み物を数多く記しており、「浅草」（「読売新聞」昭和5年1月18日、20日）、「浅草は東京の大阪」（「大阪毎日新聞」昭和5年2月25日）、「新版浅草案内記」（「改造」昭和5年4月号）、「浅草活動街」（「現代」昭和5年4月号）、「浅草」（『日本地理体系』第三卷「大東京篇」昭和5年4月 改造社）、「浅草の歳末」（『新文藝日記』昭和6年版）など、枚挙に暇がない。この中でも、最も充実した内容となっているのが『日本地理体系』所載の「浅草」で、自身の浅草観察の大きな成果と捉えることが出来る。これは「浅草は浅草」「公園七区と付近」「興行物の現状」「浅草の分析」の四章からなる。

浅草は「東京の心臓」であり、また「人間の市場」である。万民が共に楽しむ——日本一の盛り場である。従つてまた、歓楽の花の蔭に罪惡の匂ひが漂ふ、暗黒の街でもある。（中略）浅草は、どんなに新しいものを受け入れる場合にも、浅草風に——つまり、浅草型に変形してしまふ。例へば、「モダン」なあらゆる流行も勿論浅草へすさまじい勢で流れ込みつつあるが、ここでは銀座のやうにアメリカ直訳風ではなく、大胆な和洋混合種となる。

以上は「浅草は浅草」の一節で、歓楽の蔭の罪惡の匂い、すなわち盛り場特有の二面性についてふれるとともに、新しい流行も独自の形態に変え、自らのものとする浅草ならではの特性をよく捉えている。この考えは「浅草紅団」中でもおおいに活用されている。

文学的活動に目を向けると、第六次「新思潮」に發表の「招魂祭一景」（大正10年4月）が反響を呼んだ川端は、前述のとおり大正12年2月より菊池寛主宰の「文藝春秋」に編輯同人として参加し、いくつかの作品を發表している。なお、関東大震災時に市中を見学した際の様子は「大火見物」（大正12年11月）にも記載があり、多くの犠牲者の生々しい姿を目の当たりにしたことが描かれている。

一方、文壇の趨勢は、従来の私小説や心境小説とは相対するプロレタリア文学が台頭していく。このような中、既存の文学にも新しきプロレタリア文芸にも反旗を翻したのが、のちに「新感覚派」の旗手<sup>8)</sup>と<sup>9)</sup>うたわれた横光利一、そして「新しい文芸の開拓すべき方面」を模索する川端らの新興芸術文学であった。

大正13年に彼らが興した同人雑誌「文藝時代」での活動は、それを如実に表している。同誌での川端は、「新進作家の新傾向解説」（大正14年1月）にあるような、評論の立場から新しい文学を主導する役割を担っていた。



片岡鉄兵、横光利一、岸田國士とともに新感覚派映画聯盟に名を連ねた川端は、この「新進作家の新傾向解説」で訴えた新たな表現手法を、映画監督・衣笠貞之助らとの合作とも言われるシナリオ「狂った一頁」（大正15年）に取り入れている。登場人物の頭の中に様々なイメージが浮かぶ展開には、当時、文学のみならず、音楽、演劇、映画、建築といった芸術活動全般に大きな影響を及ぼしていた表現主義の影響が大きく見て取れる。作品の映像化は、衣笠監督、井上正夫主演により同年に行われた。

「浅草紅団」でも、川を走るボートを塔の上から双眼鏡で眺めるといった、映画特有のカットを思わせる場面が描かれるとともに、事物の羅列によって読者にイメージを喚起させるシーンも見られ、いくつかの大胆な試みが行われている。

ところで「浅草紅団」の執筆は、朋友・横光利一の「上海」（昭和3年より発表）に技癢を覚えたからとも言われている。舞台となった1925年の上海は、東洋最大の都市であると同時に、欧米の列強国が利権争いを展開する〈魔都〉でもある。混沌とする都市を舞台に、そこで繰り広げられる各国の様々な階級の人々、男女の愛憎などを盛り込んだ、日本における都市文学の先駆的な作品と位置づけることができる。このような都市の混沌を、川端もまた、日本随一の盛り場・浅草を舞台に描いてみたいという考えが浮かんだことは十分に納得が行く。しかし「浅草紅団」で川端が試みたのは、昭和4年から5年というある時点における都市に渦巻く混沌だけではない。川端は物語に、古くは中世の姥が池の伝説を、新しくは関東大震災直前の浅草の活況を挿入し、都市の底にたたえられた記憶、すなわち地域の文化的・歴史的背景をも取り込んだ、言わば浅草という場の定点観測を表出させている。

その一方で、川端の「浅草紅団」創作ノート<sup>10)</sup>や、自身による新聞記事のスクラップを見ると、物語後半に登場する様々なエピソードの羅列は、実際の事件の報道手法をヒントに組み立てていったのではないかと考えられる。川端が注目したものには、華やかな祭りの報告や、衆目を集めるゴシップ的なもの、猟奇的な事件などが挙げられるが、「浅草紅団」にこうしたタブロイド的な手法が用いられていることは明らかである。

このようなやり方は、「浅草紅団」の続編である「浅草祭」の「序」に自身が次のように記すことになる。

私は僅か二百頁ばかりの旧作を略読するのに、四日も費した。「嘔吐を催すほど厭であつた。」なぜこんなものの続きを書くつもりになつたかと後悔した。しかし実際、「浅草紅団」がこれほど下らない作品とは、私自身夢にも思はなかつたのである。

これは、「浅草紅団」の作品構造の歪みに対する嫌悪感とも捉えられるが、むしろ消費期限の切れた〈生もの〉を口にした際の嘔吐感に近いのではないかと考えられる。

「浅草紅団」は、川端が「浅草の見聞記、印象記」<sup>12)</sup>と記すように、昭和4年から5年の浅草の生きた姿を写した作品であり、現代の読者にとっては在りし日の浅草を知る好資料でもあるが、当時の読者は、発表されたその時代でしか味わうことの出来ない、浅草の持つ華やかさ、怪しさ、寂しさがない交ぜとなった〈生もの〉としての魅力を、読み取っていたに違いない。タブロイド的な手法は、そうしたメッセージ<sup>13)</sup>を伝えるには非常に効果的である。川端自身も後年次のように記しており、本作品を若き日の

思い出につながるものと位置づけている。

この作品は文学的価値とは別に、その時の浅草の写生によつて、新聞読者の興味を呼んだやうである。私としては、この作品よりもむしろ「浅草紅団」時代の浅草と自分とが楽しく思ひ返される。今は故人の堀辰雄君、武田麟太郎君などとも、よく浅草で会つたものだ。文章の踊る調子も楽しきのせいだらう。

次章からは「浅草紅団」の作品そのものについて分析していく。

## 2 「浅草紅団」について

「浅草紅団」の執筆開始には次のような経緯がある。<sup>14)</sup>

そのころ、東京朝日新聞では、朝刊の現代小説、夕刊の時代小説のほか、新進作家の三四十回の小説を夕刊に出してくれた。これは新聞社としても、さう通俗受けを求めないかほりに、記事の多い日は休んだ。夕刊も四頁で、紙面のゆとりが生んだ試みであつた。(略)

「浅草紅団」を書くことになつたのは、友人の十一谷義三郎氏や片岡鉄兵氏などが、私を朝日新聞に推薦してくれたのではないかと思ふ(略)「伊豆の踊子」を私の「出世作」のやうに言つてくれる人もあるが、それは後からの見方で(略)発表と同時に注目された作品は、やはり「浅草紅団」が初めてであつたかもしれない。

「浅草紅団」は材料そのものに読者の好奇心をそそったところもあつたのだらう。(略)

新聞から夕刊小説の話があつて、浅草を書いてみやうと思つたのは、大正六年に十八歳で、東京に出て以来、浅草が好きで通つたせもあるが、「浅草紅団」を書き出す二月ほど前に上野桜木町へ引越したからであつた。(略)

上野公園裏の桜木町からは、鶯谷の陸橋を渡つて、浅草公園の裏へ、歩いて近いので、私は日夜通つた。

「浅草紅団」は、「東京朝日新聞」夕刊に、昭和4年12月12日より翌昭和5年2月16日まで、37回にわたつて掲載された。挿絵は太田三郎であつた。その後『新潮』昭和5年9月号に「浅草赤帯会」と題して物語の続きが発表される。さらに『改造』昭和5年9月号に「浅草紅団」が掲載され、以上をまとめて、昭和5年、先進社より単行本が刊行された。(92530001 【口絵7】) 単行本の挿絵は新聞連載時とは異なるものを太田三郎が描き下ろしている。(同前 【口絵8】) 吉田謙吉による函のデザイン、装丁は、作品のイメージをよく伝えるものに仕上がっている。

なお川端は「『浅草紅団』は全く架空の物語である。モデルは一人もいない。」とし、「浅草の本、また不良少年研究家たちの本」から拾ひ「つなぎ合わせた部分もある」ことを記している。額面通りに受け取ることはできないが、自分は「浅草になじむことも、浅草にはいることも出来な」い「浅草の

散歩者、浅草の旅行者」で、「さういふ好奇心が「浅草紅団」を書かせた」との記載からは、<sup>15)</sup>「浅草の住人にはなりきれない作者の孤独」<sup>16)</sup>とともに、足繁く通った町を舞台に、その雰囲気から自らの筆致で作品に興したものと位置づけることができる。

### 3 浅草の記憶

それでは物語の中で、浅草という場の文化的、歴史的背景について、川端はどのように描いたのか、登場人物の姿と合わせて考察していく。

#### (1) 不良少女・弓子の両義性

物語の主人公は公園を浮遊する不良少年少女たちで、なかでも様々な扮装で登場する少女・弓子は、作者自身と思われる語り手の「私」に、浅草の内幕を教えたり、姉を襲った無頼漢に、亜硫酸丸を口に含んだ死の接吻を与える不良少女である。作品冒頭では赤いセミ・イヴニングをまとい、「男風に刈り上げた襟筋の毛の中に、白粉」を残した姿でピアノを弾いている。かと思えば、語り手や読者を惑わす次のような出で立ちで登場する。

ピアノ娘と双子としか思へない若者は、しかし彼女より二つ三つ下の十六くらゐに見える。鳥打帽をうしろ向けにかぶり、汚れたコオルテンのズボンをはいて、垢だらけの顔に――耳だけが貝細工の飾りのやうに綺麗だ。

この若者も弓子の扮装で、その後も木馬座の切符売りの娘や、安来節の興行で名を知られた玉木座の客になりすましている。さらに物語の終わりには、椿油の売り子となって「私」の目の前に現れるのである。

水族館の隣に立つ木馬座は、耳のやしっぽのとれた木馬が置かれていたと言われ、金魚や鮎といった誰もが知っている魚や亀などを観覧に供していた水族館と同様に、<sup>17)</sup>さびれた遊び場であった。一帯が、浅草の中で最も犯罪の温床となった場所であったことは充分考えられる。

一方の安来節は、大正11年に常盤座で大阪仕込みの芸が披露され、その哀調を帯びた歌声、三味線の音色が、盛り場に多く見られる地方出身者たちの間で支持を集めたと言われている。出雲出身の大和家三姉妹は、安来節とともに手踊り、芝居、銭太鼓、どじょうすくいで人気を集めた。ブームに火を付けたのが玉木座や帝京座とされ、この他にも浅草のいずれかの劇場で、日々興行が掛かっていると喧伝された。<sup>18)</sup>

弓子が椿油の売り子となる扮装は、大島のアンコであろうか。島の名産品の一つである椿油は、椿の実を搾取して作られ、古くは文禄年間における記録があるとされる。黒髪を豊かに保つ品として、長く女性達の支持を集めてきた。椿の花は10月末から咲き始め、翌年の4月中旬まで蕾を開く。6月ころ実を結び、9月になってアンコたちの手で搾取され、頭上に載せて運ばれる。アンコは「姉子」か

ら派生した言葉で、島の娘を指すが、大島がアンコを使って行商をさせたことはないとも言われている。<sup>19)</sup>

このように、作者は浅草の様々な場所に様々な姿で弓子を登場させているが、こうした変装のモチーフが作品中に散りばめられてあることは、「銀座は化粧で沢山だ。変装を必要とするほど、蔭の多い街ではない。変装はやはり浅草のものらしい。」という語り手の言葉で再認識することができる。

また、美しい娘であるはずの弓子は「唇の綺麗過ぎる少年よりも、ずっと男に見え」、少年として登場する弓子は、どことなく少女らしさを漂わせている。弓子のこの両義性は、浅草の持つ光と影——盛り場の華やかさとその陰に隠れる犯罪の臭い——の二面性と考えられる。最先端の流行、流動する活気と隣合せに、盛り場というのは、つねにうしろ暗さを抱えている。作家・川端の目には、都市のこうした面が魅力的なモチーフとして映っていたのである。

同時に浅草が、明治期以降、見世物や芝居に受け継がれた江戸の面影と、活動写真に代表される近代的な感覚の、二面性を持ち得る盛り場であることをも象徴していると言えよう。このような曖昧さが弓子の魅力であり、彼女が立ち現れる物語の中の浅草もまた、曖昧さゆえにその魅力を読者に投げかけるのである。

さらに語り手が紹介する浅草は、ピアノ娘・弓子の住む「とある路地」から紅団のメンバーの話、瓢箪池の鯉の麩をたべてしまう男の話と、次々に場面を変え、読者に入り組んだ筋立てである印象を与えている。このことについて前田愛は次のように言っている。<sup>20)</sup>

読者は、こうしたテキストの戯れ、はぐらかしに応じた軽やかな身のこなしが要求されるのだ(略)こうした語りの惑わしが、じつは変身のモチーフを引き立てる仕掛けであり、同時にまたジャズのシンコペーションやカジノ・フォーリーの舞台上で演じられたヴァラエティの場面転換をとり入れた斬新な手法である。

作者の川端にとって、このように複雑な様相を持つ、都市の姿を切り取ったかのような絡み合った設定こそが、浅草という場を表現するのに最もふさわしい方法だったと考えられる。

## (2) 姥が池の伝説

「浅草紅団」の舞台の中心は、江戸の面影を持つ浅草寺の境内ではなく、隅田公園に吾妻橋、地下鉄食堂のビルなど、むしろその周縁にひろがる近代的な浅草であり、新しい浅草の暗部に焦点がそそがれている。しかし、この新しい浅草の物語であるはずの作品に、例外的に姥が池の伝説、という前近代的なものが登場する。

姥が池とは、明治24年に埋め立てられた実在の池で、現在の花川戸公園に位置する。旧跡に今も立つ碑は、関東大震災時に被災したのち大正14年に再建されたものである。

物語に「姥が池の縁起」として登場する話は、〈ひとつ家〉という名の伝説に由来し、一軒家に住む老婆が、宿を頼む旅人の寝ている頭に石を落として殺し所持品を奪うというものである。『廻国雑記』<sup>21)</sup>には老婆ではなく、ある夫婦の娘が、旅人の代わりに石に打たれて死ぬストーリーとなっているが、「浅



草紅団」には次のような内容も記されている。

ひとつ家にある日ひとりの美しい若者が泊まる。老婆はいつものとおり殺して金品を奪おうとするが、代わりに一緒に寝ていた老婆の娘が死んでしまう。嘆きの余り老婆が飛び込んだのが、この姥が池であったという。若者は浅草漢音の化身で、娘は罪業を消すために死んだものとされている。

川端は、この娘を弓子になぞらえているのである。

そして、姥が池の縁起も三通り伝はつてゐる。しかし、姫宮が石の枕に寝たといふことは、三つとも同じだ。——だから、コンクリートの枕に寝て、また舟板の枕に寝るかもしれない弓子のことから、私はこの伝説を思ひ出すのだ。

「コンクリートの枕」とあるのは関東大震災ののち、弓子が避難した富士尋常小学校を指すが、ここで弓子は、姉のお千代が無頼漢に襲われるという悲惨な経験をすることになる。

現在の台東区立富士小学校の前身である富士尋常小学校は、明治33年の開校。大正12年6月に、東洋一の新式校舎と謳われた鉄筋コンクリート3階建ての新校舎を竣工した。同年9月1日に、始業式を行った矢先、震災によって大きな被害を受けたことが知られているが、物語では弓子が、次のように語っている。

あの学校からして、少しお話しみてるわ。鉄筋コンクリートの三階に新築して、九月一日の朝、ただの一度児童を入れただけで、あの大地震の火事に遭つたのね。でも、浅草の裏で焼け落ちないのは、あの建物しかないから、私達罹災者をあすこに住まはせてくれたのだわ。——ね、あれさ、おとぎばなしつて言へば、学校の屋上から十二階の塔の爆破を見た時には、あんただつて子供みたいに喜んでたぢやないの。

弓子は隅田川を船で漂う〈水の女〉としても登場するが、「舟板の枕」とは、そのことを表している。江戸につながる隅田川を漂い、震災で大きなダメージを受けている、そして古風とも言える伝説の娘になぞらえられる——弓子は盛り場の二面性を象徴する存在であると同時に、震災の前の古い東京の象徴でもあることがわかる。川端は、登場人物を使って盛り場浅草の特徴を見事に描き出している。

#### 4 描かれた浅草名所

浅草を象徴する風俗は、作品の後半にタブロイド的な手法を含めていくつか登場するが、ここでは物語の前半に見られる、新時代の名所となった、水族館、隅田公園、地下鉄食堂のビルについてふれてゆく。

## (1) 水族館とカジノ・フォーリー

〈日本最初のレビュー劇場〉と銘打ったカジノ・フォーリーが、公園第四区にあった水族館の二階で旗揚げしたのは、昭和4年7月のことである。レビューとは寸劇や踊り、音楽を演じる一種のショーを表す。明治32年開業の水族館は、大正期に入ってから二階を演芸場に改装し、さまざまな公演を行っていたが客足が悪く、困り果てた管理人にアドバイスをおくったのが、フランス帰りの画家・内海正性であったと言われている。ジャズ、レビュー、ボードビルの手法に加え、ドタ・バタギャグを取り入れた企画が、ただちに導入されるも、相変わらず客の入りは思わしくなく、浅草オペラのコーラス・ボーイからカジノに転身していた、エノケンこと榎本健一の熱演も実を結ばなかったことが伝えられている。この第一次カジノは、わずか二ヶ月あまりで解散に追い込まれてしまった。

第二次カジノに集ったのは、エノケンや中村是好に加えて、若手の俳優や踊り子達で、演出上のアイデアを担ったのも無名の文学青年たちであったという。スピーディーな場面転換、気の利いたギャグ、最新流行のジャズ・ソングといった趣向を次々と取り入れていった。そして、金曜日には踊り子がズロースを落とすというゴシップと、12月12日から連載の始まった「浅草紅団」の<sup>22)</sup>人気によって興行成績が上向きになったと言われている。

次の一節には、そうした時代の雰囲気がよく表れている。

まるで浅草懐古の記念物のやうに、公園第四区に取り残された昆虫館と水族館——その水族館の魚が泳ぐ前を通り、竜宮城の模型の横から、カジノ・フオウリイの踊り子達が、楽屋入りをするやうになつたのだ。パリイ帰りの藤田嗣治画伯が、パリジエヌのユキ子夫人を連れて、そのレヴユウを見物に来るのだ。

「和洋ジャズ合奏レヴユウ」といふ乱調子な見世物が、一九二九年型の浅草だとすると、東京にただ一つ舶来「モダアン」のレヴユウ専門に旗揚げしたカジノ・フオウリイは、地下鉄食堂の尖塔と共に、一九三〇年型の浅草かもしれない。

エロチシズムと、ナンセンスと、スピイドと、時事漫画風なユウモアと、ジャズ・ソングと、女の足と——。

奥山で行われていた軽業、曲芸などの見世物が引き継がれた公園第六区に対し、珍禽、珍獣などの見世物を受け継いだのが、第五区の花屋敷と第四区の水族館や昆虫館（のちに木馬館となる）であった。川端は、活動写真の華やかな賑わいを見せる昭和初期の六区とは対照的に、時代遅れ感の否めない、それまでの水族館のおかれた状況にも目を向けている。大きな人気を博すことになるレビューと、その会場の寂れ方との不可思議とも言える取合せを挙げることで、ここでも、浅草特有の二面性を描き出している。

## (2) 隅田公園

新しい時代の象徴として作品にたびたび登場するのは、コンクリートの公園、隅田公園である。関

東大震災後、災害時の避難場所を確保するために、復興局は大小60あまりの公園を新設するが、隅田公園はそのなかで最大の規模のものであった。当時の地図を見ると、隅田公園は川をはさんだ兩岸をその範囲としていることがよくわかる。リバーサイドパークとしては、日本初、横浜の山下公園と並んでウォーターフロントの市民利用を初めて実現した公園であった。完成は昭和5年で、河岸を埋め立てて敷地を拡げ堤防にも樹木を植えている。遊歩道を主体として道路と公園を一体としたのも日本で初めての試みで、本所側には1キロメートル以上の並木道路が続き、車道・歩道・遊歩道から成っていて、芝生や桜が植えられていた。浅草側は明治のはじめからのボートレース場としての伝統を受け継ぎ、運動施設が配置されている。レース観覧のために河岸沿いには遊歩道が設けられ、当時の写真<sup>23)</sup>で手すりや植栽を見ると、上品でシンプルな、洗練されたデザインであることがわかる。

このように隅田公園は、道路と河川一体の公園であると同時に、近代都市計画の手法をもって、江戸の河岸沿いに桜を植えた、つまり、西洋の近代的都市計画技術と日本の伝統的なランドスケープとが見事に合体した例のひとつであると言える。戦後になって発生した不法占拠や台風の被害によるカミソリ堤防の出現、さらに首都高速道路の建設によって、道路の貫通する水辺の遊歩道部分は公園から除外され、近年、テラス状の護岸が建設されたが、昭和初期のデザインにまで戻すことは難しいものとなっている。<sup>24)</sup>

物語では、花川戸公園から隅田公園までの道、二天門通りの様子も描かれている。

全く——その河岸へ行くに地図はいらない。弓子の地図を言葉に直しても、次のやうに簡単だ。——浅草寺の東の出入口、二天門から、二天門通を、真直ぐ大川へ突きあたれば、それでいいのだ。

電車道を横切る、川べりは山之宿町、河岸は公園工事中、左言問橋、直ぐ右に東武鉄道の鉄橋架橋中、岸に二三十艘小船がある。

現在の江戸通りが電車で、そこに山之宿という停留所があった。そして「浅草紅団」当時の河岸は工事中であり、東武鉄道の鉄橋もまた建設中である。昭和3年に完成していた言問橋にも、作者の目は向けられている。

そして枕橋——サツポロ・ビイル会社の「枕橋ビア・ホール」の大看板を左に見ながら、彼等は隅田公園へ入った。

元の枕橋の渡に鉄橋が出来ようとして、大川の真ん中に起重機がすゑられ、その真向ひに五重塔が立つてゐる。その緑色の屋根は、鉛色の水と町との上に浮ぶと、も早建築物ではなく、緑の植物のなつかしさだ。

新しい隅田公園は、そこから長命寺まで、現代風にいふならば、商科大学の艇庫に突き当たるまで、ボート・レエスのコオスを河岸に沿うた、アスファルトの散歩道だ。昭和の向島堤だ。

これは、言問橋を本所側に渡ってからの光景で、ちょうど橋を渡ったあたりに立って、まず枕橋の

方向を見ている。ビア・ホールとは、明治39年にサッポロビールが建てた吾妻橋工場に近接するビアホール<sup>25)</sup>のことで、現在もこの地にはアサヒビール本社、そしてビアホールが屹立し、隅田川にべりに個性的な風景を投げかけるスポットとなっている。次に、鉄橋とあるのは、震災によって焼け落ちた古い吾妻橋に代わる、建設中の吾妻橋のことで、完成は昭和6年まで待たねばならない。隅田川の真ん中に据えられた起重機、これも鉄の塊であるが、まるで五重の塔を飲み込むかのような表現となっているのが印象的である。

ここでは作者の川端が、鉄とアスファルト、コンクリートに覆われた水辺の空間を描くことで、震災以前には見られた江戸の名残が、新しい東京に凌駕されていく様子をダイナミックに表しているということがうかがえる。

### (3) 地下鉄食堂のビル

そしてもうひとつ、水辺を覆うもののうち作品の中で重要な役割を果たす建物が登場する。それが地下鉄食堂のビルである。現代の我々にとっても、なじみ深い場所にあった建物であるが、昭和初期に浅草の名所であったことを知る人は少ないであろう。

数年前、近代的な建物に建て替えられるまで、地下鉄銀座線の出口のひとつにそのビルはあった。花川戸ビルあるいは雷門ビルと呼ばれ、営団地下鉄の事務所として使われていた建物である。このビルの完成は昭和4年。「浅草紅団」のころは、まさに出来立ての東京新名所であった。地下鉄道は、昭和2年に上野—浅草間で開業。東京地下鉄道株式会社は収益の増加を目的に食堂経営や日用品の販売に着手し、同ビルの食堂経営はその嚆矢であった。<sup>26)</sup>「浅草紅団」には、1階に売店と食券売場、料理の見本棚があり、2階3階が禁酒食堂で、4階5階は普通食堂、6階に調理室、屋上庭園にもものぼれるようになっていたことが描かれている。

古い十二階の塔は地震で、ぼきりと折れた。地下鉄食堂の階数はその半分の六階だが、高さ四十メートル、浅草で唯一つエレベエタアのある見晴し塔だ。

高さ40メートルといえば周りに高層ビルのない昭和4年ではかなりの高さを感じたと思われる。そして内部にはエレベーターもあった。この建物は昭和20年の空襲にも耐えたわけだが、新旧の建物の外観を比べると窓の位置などが同じことがわかる。解体直前まで覆いがかけられていた箇所には、尖塔があったと思われる。

尖塔——教会の屋根の鐘楼のやうな、円いコンクリートの塔だが、東西南北に四つの見晴し窓、窓の裾は金網、壁は裾だけ緑色で、上は薄水色、円い天井にガラスの装飾燈だ。

このような凝ったデザインは人の目を引くためのものだったと思われ、震災前の六区の活動写真館に見られる意匠に、近しい印象を受ける。筆者は平成12年に許可をいただいて、ビル内を見学する機



会に恵まれた。内装はもちろん変わっていたが、部屋の形などは当時のままのところもあり、天井が高いこと、とくに5階部分は他の階よりも高く、柱の意匠も他の階とは違ったものようであった。エレベーターも箱は残っていなかったが、通り道が倉庫として使われていたり、回数表示盤は取り付けられたままであった。さらに壁のはがれからは当時の壁が、また、床そのものが残っているところもあり、壁は明るいピンク色、床はレンガ色で、モダンなつくりであったことがうかがえた。現在この地に立つ新しいビルは、地下鉄の出入り口としてバリアフリー対応がなされ、利用者の便を助けているが、前身の建物から引き継いだ意匠を確認することは難しい。

ところで、「浅草紅団」の物語の前半は、弓子を中心に展開しているが、後半では、椿油の売り子として現れる最終場面まで姿を現さなくなってしまう。代わって物語の前面に押し出されてくるのは、弓子のような曖昧さを持たない、算術の得意な新しい時代の女性・春子である。春子はコンクリートの地下鉄食堂のビルから隅田川を俯瞰する。

「ああ、おいしい。食堂の横を上つて来るうちに、水道にもお味がつくのかわ。きっと。」と、彼女は水を飲む鳥のやうに、柔かい咽を伸して舌鼓打ちながら、椅子へ帰つて来た。

彼女の飲む水には、コンクリートの味がついている。物語の中で、弓子と春子に対照的な役割が与えられているのは明らかなことで、水の女である弓子が新しい女である春子に取って代わられた時、水辺の空間に位置する浅草は鉄とコンクリートに覆われ、あたりに漂う江戸の面影は失われていった。そして物語は、椿油売りに扮した弓子「いよいよ私だってことが分らないでしょう。」というセリフで幕を閉じることになる。

作者の川端は物語に、薄れてゆく弓子の面影や新しく生まれた春子の姿を描くことで、うつりゆく浅草の情景を表わしたのである。

## おわりに

「浅草紅団」は、古い浅草と新しい浅草を、弓子、春子というふたりの女性に投影させるとともに、土地の伝説や震災前の歴史に加え、新風俗、新風景を案内する趣向をとった作品といえるだろう。作者の川端は、表現主義的な手法を映画シナリオに取り入れた経験から、本作品にも実験的な表現を取り入れており、それが読者に、都市の混沌や浅草という盛り場特有の華やかさ、猥雑さを訴える有効な手段となっている。川端が目指したのは、「五年十年住んだとて、到底現実の浅草、生きた浅草の真相を捉へることは出来ない」という添田啞蟬坊の言葉を受けつつも、自ら足繁く通ったこの盛り場で「生きた浅草」の魅力を探し、その姿を表現することであった。

盛り場の華やかさとは対照的なうしろ暗さ、土地の伝説と震災によって失われた風景、そして浅草の人々が抱える寂寥感に、天涯孤児の身となった川端は引き寄せられたが、同時に、震災から立ち上

がる盛り場の姿を、新しい風景の中でダイナミックに描いている。

「浅草紅団」は、作家・川端康成が、都市に内在するエネルギーを捉えるべく果敢に挑戦した、実験的な都市小説であった。

## 【註】

- 1) 『台東区史』(社会文化編)(昭和41年)
- 2) 『台東区史』(近代行政編)(昭和41年)
- 3) 東京都『東京百年史』第四卷(昭和47年)に所載の『大正震災志(上)』に記載されている東京府の罹災人口による。
- 4) 前掲『台東区史』(社会文化編)
- 5) 「『浅草紅団』について」(昭和26年)
- 6) 羽鳥一英「川端康成「浅草もの」をめぐって」『国文学』(昭和41年8月)には「浅草ほど天涯放浪の魂を悲しくひきつけるところはなかった」とある。
- 7) 前掲「『浅草紅団』について」
- 8) 「世紀」(大正13年11月)において、千葉亀雄が「文藝時代」掲載作品の傾向により命名した。
- 9) 「文壇的文学論」(大正13年12月)
- 10) 栗坪良樹「作家案内—川端康成」『浅草紅団 浅草祭』(講談社文芸文庫 平成8年)
- 11) 「私は「浅草紅団」のために幾冊かのノオトを作ったが、その十分の一、二十分の一も活用することは出来なかつた。」(「浅草紅団」続稿予告 昭和9年7月)とあるが、川端康成記念会所蔵の「浅草紅団」創作ノート」には、タブロイド的な新聞記事が、自身のメモ書きの横に添付されている。
- 12) 前掲「浅草紅団」続稿予告
- 13) 前掲「浅草紅団」について」
- 14) 前掲「浅草紅団」について」
- 15) 前掲「浅草紅団」について」
- 16) 十返肇「浅草紅団」解説(新潮文庫 昭和30年)
- 17) 一瀬直行『随筆・浅草』(昭和41年 世界文庫)
- 18) 台東区教育委員会『台東区文化財調査報告書第五章 浅草六区——興行と街の移り変わり——』(昭和62年)
- 19) 鈴木昶『日本の伝承業—江戸売薬から家庭薬まで—』(平成17年 葉事日報社)
- 20) 前田愛「劇場としての浅草」『都市空間の中の文学』(平成元年 筑摩書房)
- 21) 道興「廻国雑記」(長亨1年・1487年)『群書類徒』第18輯
- 22) 向井爽也『日本の大衆演劇』(昭和37年 東峰出版)
- 23) 川本昭雄『隅田公園』(昭和56年 郷学舎)
- 24) 前掲『隅田公園』
- 25) サッポロビール株式会社『サッポロビール120年史』(平成8年)
- 26) 東京地下鉄道株式会社『東京地下鉄道史 坤』(昭和9年)には、その経営について「範を阪急食堂に則り、内外共に完備せる科学的施設をなし、料理の佳味と低廉とは、都下食堂経営者の先端として異彩を放ち、忽ち浅草の一名所となつた。」とある。

※本稿中に引用した川端作品は、すべて『川端康成全集』(昭和56年 新潮社)を出典とし、必要に応じて旧字は新字に改めた。各引用作品の所載巻数を以下に示す。

「浅草紅団」(第4巻)

「浅草祭 序」(第4巻)

「浅草」(第26巻)

「文壇的文学論」(第30巻)

「新進作家の新傾向解説」(第30巻)

「浅草紅団」続稿予告」(第33巻)

「『浅草紅団』について」(第33巻)